

資料3

清元「六玉川」(弘化三(一八四六)年、三世鳥羽屋里長作曲「草枕露玉歌和」)
☆

鳥が啼く あづまからげの草枕

急がぬ旅も敷島のしきしまの 道をたどりて六玉川 筆に綴りて書き残す

景色は歌の徳ならん

足曳きの山踏みわけて遙々と 霞たなびく遠近の 眺めもあかぬ七重八重

花のしがらむ影添えて

色には井手の山吹に 蛙も歌の風情あり

かゝる名所に紀の國の 高野の奥の流れをば 汲みやしつらん 旅人の

アゝ忘れても

野路はゆかりの色深く 錦の萩の下葉まで もれてぞおける白露の 月はやどりて

夜もすがら 恋しき人は鈴虫の

ふり棄てられて機織の 夜寒をわびる閨の戸に つゞれさせてうきりぎりす

たれを松虫焦れてすだく 我も思いに堪えかねて

いとゞ心のやるせなや 迫る恪気に津の國の 濡るゝ袂の小夜衣 更けて砧の憎らしや

どこの口舌の戻り足 言い訳くらき爪琴の 調子もほんに愚痴ながら

いつか結びし中の緒に 通う千鳥の睦言に 夢の最中は調布や

照る月のたゞよう六玉川 干してさらさら晒す細布

(晒し合の手)

晒す細布手にくるくると 晒す細布手にくるくると いとしおらしき賤のわざ

実に玉川の流れより 澄める心の清元の すさみに残す筆の跡

榮久しくめでたけれ

☆寛政十一(一七九九)年江戸中村座初演舞踊曲「六玉川 衛 柵」が起源か。